動詞「広まる」と「広める」の意味分析
――日本語教育の観点から――

李　　澤　熊

1．はじめに

本稿の目的は、以下の 2 つである。

第一に、動詞「広まる」と「広める」が持つ複数の意味を記述し、それらの複数の意味の関連性（多義構造）を明らかにする。なお、この 2 語は自・他対応動詞であるため、複数の意味間の対応関係についても検討する。

第二に、以上の分析に基づき、 2 語のそれぞれの複数の意味（多義的別義）に対する効果的な学習指導法について考察する。具体的には、各別義における「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、各別義において想定され得る「非共起例（誤用例）」も提示し、その理由・原因について検討する。

先行研究として、まず、現在刊行されている辞典・辞書類[1)]を調べてみると、「広まる」と「広める」は多義語として扱われているが、それらの意味を選んで掲げる基準は必ずしも明らかではない。また、当然のことながらそれぞれの意味の相互関係も不明確である。

次に、「広まる」の意味を分析した研究として相澤（1983）があげられる。相澤（1983: 3）は、「広まる」の意味について、「人から人へ伝わりやすいことが、多数の人間に受け容れられることによって、広い範囲にゆきわたる」と述べている。本稿では、この記述に追う面も少なくないが、相澤の研究は、「広がる」との類義語分析が中心となっているため、「広まる」の意味用法を網羅的に検討していない。例えば、「広まる」は次の例のように、〈人から人へ伝わりやすい〉ということを想定しない場合にも用いられることがある。

(1)　海外の文化に触れることによって、もっと視野が広まると思います。

本稿では、以上の先行研究を踏まえて、「広まる」と「広める」について、より精緻な意味記述を提示し、 2 語が持つ複数の意味の関連性（多義構造）を明らかにする。

具体的な考察に入る前に、まず、1.1節では、多義語の基本的な性質、多義語の位置付けについて、先行研究を踏まえて概観する。続いて、1.2節では、多義語分析の課題とその解決のために援用する概念について、先行研究に基づき簡略に説明する[2)]。

1.1. 多義語の位置付け

国広（1982）は、多義語と同音異義語について、次のように定義している。

> 「多義語（polysemic word）」とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う[3)]。（国広 1982: 97）
> 「同音異義語」とは、同一の音形に、意味的に関連を持たないふたつ以上の意味が存在する場合に生じるふたつ以上の語のことである。（国広 1982: 97）

上記のように、国広（1982）は「多義語」と「同音異義語」を区別する基準として、意味的な関連の有無を提示しているが、これは決して明確なものではなく、「同音異義と多義の現象は、本質的に連続しているのであり、境界を定めようとすることがそもそも無理なことであると考えるべきである」（p. 108）と述べている。さらに、具体的に観察される 2 つ以上の意味が、多義であるのか、単一の意義素の文脈的変容であるかの判断基準について、「ある一定の意味を想定し、それが文脈の相違に平行して少しずつ変わって現れると考えられるか否かということである」（p. 109）と述べている。このように、国広（1982）は同音異義語、多義語、単義語（単一の意義素の文脈的変容）のそれぞれの境界を明確にすることは困難であり、連続的であるという立場を取っている[4)]。

さて、籾山（2016）は、多義語に関する膨大な研究を詳細に検討し、多義語の多様性について、次のように述べている。

> ある語（音形）に（何らかの観点から）複数の意味が想定できる場合、その複数の意味がどの程度自立性（顕著性・慣習性）を有するかは、程度問題（連続的）であるという見通しが立てられる。なお、ここでの自立性の程度とは各母語話者における定着の程度および言語共同体における慣習性の程度のことである。また、複数の意味の関連性の程度も連続的であると考えられる。つまり、単義語と同音異義語を両極とし、その中間に、各意味の自立性の程度、複数の意味の関連性の程度が異なる多様な多義語が連続的に存在すると想定される。（籾山 2016: 512）

ここで、いくつか具体例をあげてみよう。まず、単義語の例としてしばしば引用されるのは child（子供）である。「我が子の健やかな成長を祈るために鯉のぼりをあげる」における「子」は「男の子」を指し、「我が子の健やかな成長を祈るために雛人形を飾る」における「子」は「女の子」を指すが、これは多義語ではなく、いわゆる単義語の文脈的変容であるとされる（池上 1975: 126–127、国広 1982: 108–109）。なお、「紫式部」「銀座」などの人名や地名、「腫瘍」「酸性雨」などの専門分野の用語も一般的に単義語となる。

次に、同音異義語の例としては、「せんたく（選択／洗濯）」があげられる。例えば、「苦しいせんたく（選択）を迫られる」と「手洗いせんたく（洗濯）のコツを紹介する」という例において、「せんたく」という音形に対応する〈選択〉と〈洗濯〉という 2 つの自立した意味を認めることができるが、この 2 つの意味からは、何らかの関連性を見出すことが非常に難しい。強いて関連性（共通点）を見出すとすれば〈何らかの行為をすること〉ということになるだろう。しかし、この意味は「せんたく」という音形に結びついた自立した意味としては考えにくい。以上のことから、「選択」と「洗濯」という 2 つの語は、たまたま同じ音形を有している同音異義語であるということになる。

さらに、典型的な多義語の例としては、「作る」があげられる。例えば、「あまった木材を使って、犬小屋を作る」と「新しい教育システムを作る」における「作る」には、それぞれ〈主体が材料や原料に何らかの力を働かせて、道具や器具を生じさせる（具体物の産出）〉と〈主体が（思考を働かせるなどの）何らかの労力によって、ある規則や制度を生じさせる（抽象物の産出）〉という明らかに異なる 2 つの意味が認められる。また、この 2 つの意味の間からは、強い関連性を見出すことができる。つまり、両者からは〈主体が何らかの労力によって、あるものを生み出す〉という共通点が導き出せるということである[5)]。

続いて、典型的な多義語と同音異義語の間に位置する同音異義語寄りの多義語として、籾山（近刊）は「太郎は分からないところを先生にたずねた（尋ねた）」と「私は作家の X 氏をホテルにたずねた（訪ねた）」における「たずねる」という語をあげている。なお、籾山（近刊）によると、同音異義語寄りの多義語とは、自立性の高い複数の意味を有すると共に、（典型的な多義語と比べて）複数の意味の関連性が弱い語のことである。

最後に、単義語寄りの多義語として、籾山（近刊）は「英語［機械の使い方／人生の意味］を教える」と「名前［電話番号／アドレス／いい店］を教える」における「教える」という語をあげている。なお、籾山（近刊）によると、単義語寄りの多義語とは、（想定される）複数の意味（の少なくとも 1 つ）の自立性が（典型的な多義語と比べて）低く、また、複数の意味の関連性が（典型的な多義語よりも）強い語のことである。

以上のように、本稿では、多義語の定義、位置付けなどについて、基本的に上記の先行研究と同じ立場に立って、考察を進めていく。

1. 2.　多義語分析の課題

多義語分析の課題について、詳細に記述・検討されているものとして、籾山の一連の研究があげられる。籾山（2001, 2002, 2019, 近刊）は、多義語の分析において明らかにしなければならないこと、即ち、多義語分析の課題として、少なくとも以下の 1)～ 4)が考えられると述べている。

1 ）何らかの程度の自立性を有する複数の意味（多義的別義）の認定
2 ）プロトタイプ的意味の認定
3 ）複数の意味の相互関係の明示
4 ）複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

本稿では、上記の課題のうち、主に 3) と 4) の課題について詳しく検討する。

まず、 3) の課題について、籾山（2001: 33）は多義語の定義から必然的に導かれるものであるとし、「多義語の複数の意味は相互に何らかの関係が認められるのであるから、個々の多義語の分析にあたり、その関連の実態を明らかにすることが課題となる」と述べている。また、「多義語の実際の分析を通して、複数の意味の間には一般にどのような種類の関連が認められるかということを明らかにすることも重要な課題である」とし、「メタファー、シネクドキー、メトニミーという 3 種の比喩が、複数の意味の関連付けに重要な役割を果たすと考える」と述べている。本稿では、多義語の複数の意味の関連性を 3 種の比喩のうち、メタファーの観点から考察を行う。なお、定義については、籾山・深田（2003: 76–87）、籾山（2010: 35–52, 近刊）に従い、以下のように示す[6)]。

> メタファー（隠喩）： 2 つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。「類似性に基づく」というのは、 2 つの事物・概念に類似性が内在しているというよりも、人間が 2 つの対象の間に主体的に類似性を見出すことを表していると考えたほうが適切である[7)]。

以下、諸研究に基づき、メタファー（隠喩）についての具体例を確認する。ここでは 2 種類の例をあげる。まず、位置や形状など、いわゆる「外見の類似性に基づくもの」として、「パンの耳」「お金の耳をそろえて返す」における「耳」という語があげられる。「耳」は、本来〈脊椎動物の頭部の左右にあって、聴覚と平衡覚をつかさどる器官〉という意味で用いられるが、ここでは、〈織物・紙類・食パンなどの端のほうの部分〉という意味となる。これは、（人間の）顔における耳の位置に着目し、平面的な具体物の端に位置する部分を（人間の）耳に例えて表現していると考えられる。つまり、外見の類似性に基づくメタファーとしてとらえられる。

次に、「抽象的な類似性に基づくもの」として「荷物」という語があげられる。「荷物」は、本来〈運搬や運送をするための物〉という意味で用いられるのが、「子供をお荷物だと思う親が増えている」というように、「人間」に関して使われる場合もある。この場合の「荷物」は〈何かをする際に負担となる人〉というように記述することができる。なお、両者の間からは〈ある対象が（主体にとって）負担となる〉という共通点（つまり、抽象的な類似性）を導き

出すことができ、メタファーによって意味拡張が成り立っているととらえられる。

さて、メタファーを含む 3 種の比喩の定義・性質・種類をめぐっては諸説あるが、本稿では基本的に上記の定義に従って分析を行う。

4)の課題について、籾山（近刊）は、 3)をさらに発展させたものであるとし、「多義語の複数の意味の相互関係を明示することに加えて、個々の意味に共通する意味（スキーマ的意味）を抽出すること、個々の意味を構成要素として含むフレームを明示すること、多義構造全体における個々の意味の位置付けを示すこと等が課題となる」と述べている。

この課題に取り組んだ研究としては、①「プロトタイプに基づくネットワーク（家族的類似カテゴリー（Taylor 1989, 1995[2], 2003[3])、放射状カテゴリー（Lakoff 1987))」、②「プロトタイプとスキーマに基づくネットワーク（スキーマティック・ネットワーク）（Langacker 1987, 1988a, 1988b, 1990, 1999, 2008)」、③「フレームに基づくネットワーク（田中 1990、国広 1994、松本 2010 など)」、④「上記の『放射状ネットワークモデル』『スキーマティック・ネットワークモデル』『フレームに基づくモデル』を統合したモデル（籾山（近刊))」[8]、⑤「類似関係・隣接関係・包摂関係に基づくネットワーク（瀬戸 2007)」があげられる[9]。

本稿で考察する「広まる」と「広める」の多義構造の説明については、上記の②「プロトタイプとスキーマに基づくネットワークモデル」が有効であると考え、以下では 2 語の多義構造を明らかにする前提として、Langacker の「スキーマティック・ネットワークモデル（schematic-network model)」について簡単に概観する。

ネットワークにおける個々の節点（node）は、「カテゴリー化関係」（categorizing relationships）によって関連付けられる。なお、「カテゴリー化関係」には、「スキーマ関係」（schematicity）と「拡張関係」（extension）という 2 つの基本的なタイプが関係している[10]。

「スキーマ関係」、つまり［[A]⟶[B]］は、[A] が [B] に対してスキーマ的であり、[B] は [A] を詳細化したもの（elaboration）あるいは具体化したもの（instantiation）であることを表す。言い換えれば、[B] は [A] と両立する（矛盾しない）が、([B] は）[A] より詳細であることになる（従って、この関係は意味の「特殊化（specialization)」あるいは、逆に言うと「抽象化（abstraction)」の関係となる)。

それに対して、拡張関係、つまり［[A]- - - ▸[B]］では、若干の衝突が生じる。すなわち、拡張された意味 [B] に達するには、基本的意味 [A] のある意味特徴が保留あるいは変更されなければならない。つまり、拡張関係は意味における何らかの不一致を含むことになる[11]。以上のことを図示すると、図 1 のようになる。

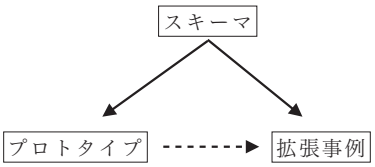

図 1　Langacker（1990: 271, 図 4 (a))

意味拡張の例として、Langacker（2008）から mail という語を取り上げる[12]。名詞 mail には、少なくとも以下の意味 (1) と意味 (2) を認めることができる。

意味 (1)：郵便システムによって配達される、物理的な意味での伝言（[MAIL]：普通の郵便）
意味 (2)：コンピュータによって、電子工学的に配信される伝言（[EMAIL]：電子メール）

この2つの意味のうち、意味 (1) は mail のプロトタイプ的意味として用いられると考えられる。また、意味 (2) は、意味 (1) から拡張関係（メタファー）によって成り立っていると考えられる。つまり、両者の間には、「伝言は主に言語によって表現され、書いて送ったものを相手が受け取って読むという一連の流れがあり、一定のネットワークを通じて配達される」という共通の意味特徴を抽出することができる。つまり、スキーマは以下の意味 (3) のように示すことができる。

意味 (3)（スキーマ）：一定のネットワークを通じて配達される伝言（[MAIL′]）

なお、意味 (1) と意味 (2) の間には、それぞれ〈伝言が紙に書かれ、物理的に配達される〉、〈伝言が（紙に書かれる代わりに）コンピュータの画面に現れる〉という点において不一致が見られる。以上のことを図示すると、図 2 のようになる。

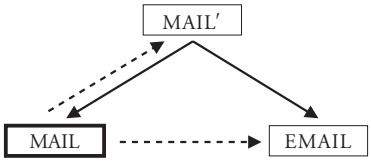

図２ Langacker（2008: 226, 図8.5 (c)）

本稿では、Langacker が提唱する以上の「スキーマティック・ネットワークモデル」に基づき、「広まる」と「広める」の多義構造を明らかにしていく。

２．「広まる」の意味分析

2.1. 多義的別義

本節では、「広まる」について 2 つの多義的別義を認め、考察を行う。

①別義 (1)[13]：〈ある事柄の〉〈範囲が〉〈大きくなる〉

(2) 科学技術の進展に伴い、人類の活動領域が一気に｛広まった｝。
(3) 海外の文化に触れることによって、もっと視野が｛広まる｝と思います。
(4) 今回の研修旅行で、少し教養が｛広まった｝気がします。
(5) 社会人になって一番変わったことは、人間関係の幅が｛広まった｝ことです。
(6) 海外に出かけて異文化に触れることは、知見が｛広まる｝とともに良いリフレッシュにもなる。

別義 (1) は、ある事柄の範囲が大きくなる、つまり拡大することを表す。ここでの事柄というのは、見聞、視野、経験などのように、人間の営みに基づくもの、つまり何らかの活動が伴うものを指す。なお、幅、面積、空間などの物理的な範囲が大きくなる場合は、現代日本語ではあまり用いられず、代わりに「広がる」が使われる。

(7)　河川改修によって川幅が｛？広まった／広がった｝。

②別義 (2)：〈ある事柄が〉〈広範囲にわたって〉〈多くの人に〉〈知られる・行われるようになる〉

(8)　日本にラーメンが｛広まった｝のは明治時代とされている。
(9)　彼の作品は、芥川賞受賞をきっかけに、一気に｛広まった｝。
(10)　野球がヨーロッパであまり｛広まらない｝理由はどこにあるのだろうか。
(11)　自販機荒らしの新たな手口が、口コミでどんどん｛広まって｝しまった。
(12)　お盆の行事が一般庶民に｛広まった｝のは江戸時代からだと言われている。

別義 (1) は、「見聞が広まる」のように、見聞という事柄が豊かなものになる（つまり、事柄そのものの拡大）ということを表しているのに対して、別義 (2) は、「問題となる事柄が、多くの人に知れ渡る（あるいは、行われる）ようになる」ということを表している。

さて、別義 (2) は別義 (1) と類似性が認められることから、メタファー（隠喩）によって意味拡張していると考えられる。つまり、別義 (2) と別義 (1) の間からは〈ある事柄の範囲が大きくなる〉という共通の意味特徴（スキーマ）を導き出すことができるということである。

2.2.　多義構造

以上、「広まる」について、２つの多義的別義を認め、分析を行った。また、別義間の関連性については比喩の観点から説明した。なお、「広まる」は以下のような多義構造を成していると考えられる。

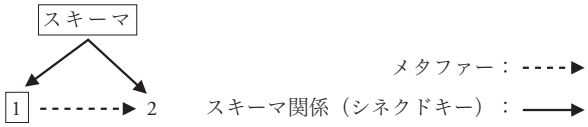

図３　「広まる」の多義構造

以下では、図３の「広まる」の多義構造の表記について、簡略に説明をする。

(a)　「広まる」のプロトタイプ的意味は、別義 (1) となる。

(b) 別義 (1) と別義 (2) はメタファーの関係にあり、共通する意味として〈ある事柄の範囲が大きくなる〉というスキーマを抽出することができる。

3.「広める」の意味分析

3.1. 多義的別義

本節では、「広める」について 2 つの多義的別義を認め、考察を行う。

①別義 (1)[14]：〈人・組織が〉〈ある事柄に対する〉〈範囲を〉〈大きくする〉

(13) 見識をさらに｛広める｝ために、大学院進学を決めた。
(14) 生徒の皆さんには、この体験を生かしてさらに視野を｛広めて｝ほしいと思います。
(15) 読書をする理由として、知識を得たい、教養を｛広めたい｝などが考えられる。
(16) この会社では、最新の情報の習得と知識の幅を｛広める｝ために、毎月社員研修を実施している。
(17) この電動カートは、シニア世代や足の不自由な人の行動範囲を｛広める｝ために開発された。

別義 (1)、人や組織がある事柄の範囲を大きくする、つまり拡大させることを表す。ここでの事柄というのは、見聞、視野、経験など、人間の営みに基づくもの、つまり何らかの活動が伴うものを指す。なお、例 (18) のように、幅、面積、空間などの物理的な範囲を大きくする場合は、現代日本語ではあまり用いられず、代わりに「広げる」が使われる[15]。また、例 (19) のように、ものが主語になっている場合もあるが、いわゆる「擬人化」という表現法であると考えられる。

(18) 床面積を｛? 広める／広げる｝。
(19) 発達中の台風が勢力範囲をさらに｛広める｝。

②別義 (2)：〈人・組織が〉〈ある物事を〉〈広範囲にわたって〉〈多くの人に〉〈知られる・行われるようにする〉

(20) 無謀だと言われるかもしれないが、インドで日本のカレーを｛広めたい｝と考えている。
(21) にっぽんど真ん中祭りの開催に向けて、名古屋の魅力を国内外にどんどん｛広めて｝

いきたいと思います。

(22) 日本ゴルフツアーの選手会長は、先日の理事会でゴルフのすばらしさを子供から大人まで｛広めたい｝と抱負を語った。

(23) 30歳で脱サラして地元に戻り、現在は地元の酒造会社と協力して地酒を｛広める｝活動をしています。

(24) 先日起きた殺人事件の被害者やその遺族の情報が、何者かによってネットで｛広められて｝しまった。

別義 (1) は、「見識を｛広める｝」のように、見識という事柄を豊かなものにする（つまり、事柄そのものを拡大する）ことを表す場合に用いられるのに対して、別義 (2) は、「問題となる事柄に対して、多くの人に知れ渡る（あるいは、行われる）ようにする、つまり、人々が何かを受け入れてさらにそれを他に伝える」ということを表す場合に用いられる。

さて、別義 (2) は別義 (1) と類似性が認められることから、メタファー（隠喩）によって意味拡張していると考えられる。つまり、別義 (2) と別義 (1) の間からは〈ある事柄の範囲を大きくする〉という共通の意味特徴（スキーマ）を導き出すことができるということである。

3.2.　多義構造

以上、「広める」について、２つの多義的別義を認め、分析を行った。また、別義間の関連性については比喩の観点から説明した。なお、「広める」は以下のような多義構造を成していると考えられる。

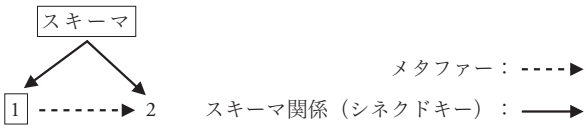

図４　「広める」の多義構造

以下では、図４の「広める」の多義構造の表記について、簡略に説明をする。

(a)　「広める」のプロトタイプ的意味は、別義 (1) となる。

(b)　別義 (1) と別義 (2) はメタファーの関係にあり、共通する意味として〈ある事柄の範囲を大きくする〉というスキーマを抽出することができる。

４．日本語教育の観点からの考察――コロケーションの提示と非共起例（誤用例）分析――

本節では、以上の分析に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導法について考察する。

具体的には、2語における各別義の「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、各別義において想定され得る「非共起例（誤用例）」も提示し、その理由・原因について検討する。

4.1. 「広まる」

①別義(1)：〈ある事柄の〉〈範囲が〉〈大きくなる〉

「コロケーション」

〈事柄〉が：知見、才能、教養、知識、視野、見聞、幅、範囲、領域

〈手段・方法〉で（によって）：読書、旅行、アルバイト、留学、異文化交流

〈様態〉：さらに、もっと、だいぶ、かなり、少し、ある程度、必ず、きっと

「非共起例（誤用例）」

(25) a ×最近、体重が｛広まった｝。

b ○最近、体重が｛増えた｝。

→単なる数量の増加には使いにくい。

(26) a ×最近、物忘れが｛広まった｝。

b ○最近、物忘れが｛酷くなった｝。

→物事の度合いには使いにくい。

(27) a ？仕事が｛広まる｝。

b ○仕事の幅が｛広まる｝。

→範囲の拡大を想定しにくい事柄については使いにくい。

②別義(2)：〈ある事柄が〉〈広範囲にわたって〉〈多くの人に〉〈知られる・行われるようになる〉

「コロケーション」

〈もの〉が：作品、製品、商品、茶の湯、ラーメン、お茶、醤油

〈こと〉が：噂、認識、考え方、話、情報、理解、言葉、評判、信仰、名、習慣、思想、意識、風潮、仏教、文化、誤解、技術、輪、感染、キリスト教、インターネット、人気、稲作、サービス

〈時点・時期〉から：2000年頃、江戸時代、70年代、60年初頭、明治初期

〈時点・時期〉に：奈良時代、80年代、5世紀頃、江戸時代以降、18世紀後半

〈場所〉から：日本、北欧、中国、バンコク、三河地域、地元、新潟地方

〈場所〉で：世界、世界中、全国、国内、海外、会社、職場、大学、あちらこちら

〈場所〉まで：東京、ハリウッド、東南アジア、インド、南米、職場

〈場所〉に：全国、世界中、各地、世間、世の中、全土、社会、地域、全域、各国、企業、

市場、町中、社内、海外

〈人〉に：庶民、人々、民間、大衆、女性、市民、皆

〈手段・方法〉で：口コミ、噂、経由、ルート、口伝、宣伝

〈様態〉：一瞬で、急速に、あっという間に、またたく間に、たちまち、自然に、確実に、着実に、短期間に、次第に、徐々に、だんだん、すぐ、どんどん、一気に

「非共起例（誤用例）」

(28) a　？ドアが｛広まった｝。

b　○センサー技術の進歩により、自動ドアが一気に｛広まった｝。

→すでに多くの人に知れ渡っているものについては使いにくい。

(29) a　？彼の気持ちが｛広まった｝。

b　○彼の気持ちが｛伝わった｝。

c　○彼女の失恋の噂が｛広まった｝。

→単に相手に伝わる場合は使いにくい。広範囲・多くの人に知れ渡るようになる場合に用いられる。

(30) a　×交通事故が｛広まった｝。

b　○交通事故が｛増えた｝。

→単なる数量の増加には使いにくい。

4.2.「広める」

①別義 (1)：〈人・組織が〉〈ある事柄に対する〉〈範囲を〉〈大きくする〉

「コロケーション」

〈人・組織〉が：学生、生徒、若者たち、子供たち、ボランティア団体、企業

〈事柄〉を：見聞、知識、知見、視野、活動、範囲、領域、教養、経験、幅

〈場所〉で：海外、世界、アジア、外国、いろいろな所

〈手段・方法〉で：自分たちのやり方、ボランティア、いろいろな手段、ユニークな方法、自分たちの手、自分の力

〈様態〉：地道に、熱心に、真剣に、着実に、懸命に、もっと、さらに

「非共起例（誤用例）」

(31) a　×出勤を｛広める｝。

b　○子連れ出勤を｛広める｝活動をしている。（別義 (2)）

→範囲の拡大を想定しにくい事柄については用いられない。

(32) a　？風呂敷を｛広める｝。

b ○風呂敷を｛広げる｝。

c ○日本伝統の風呂敷を｛広める｝活動をしている。（別義(2)）

→物理的な範囲を大きくする場合は、現代日本語ではあまり用いられない。

(33) a ×資産を｛広める｝。

b ○資産を｛増やす｝。

→単なる数量の増加には使いにくい。

②別義(2)：〈人・組織が〉〈ある物事を〉〈広範囲にわたって〉〈多くの人に〉〈知られる・行われるようにする〉

「コロケーション」

〈人・組織〉が：日本人、ユダヤ人、宣教師、聖徳太子、空海、出版社、酒造会社、自治体、宗教団体、マスコミ

〈もの〉を：作品、酒、製品、商品、木の家、（幸せの）花、お茶

〈こと〉を：教え、理解、文化、噂、情報、技術、認識、仏教、考え方、思想、信仰、キリスト教、教育、名、魅力、価値、サービス、消費、音楽、農業、スポーツ、柔道、デマ

〈人・組織〉と：皆さん、友達、仲間、友人、各分野の人々、自治体、行政

〈出発点〉から：日本、家庭、地域、北部、地方、子供

〈着点・範囲〉まで：大人、アメリカ、ヨーロッパ、世代、隅々

〈対象〉に：世界、全国、世の中、世間、人々、地域、全域、海外、国民、各地、学校

〈時点・時期〉に：最初、5世紀、末期、現代、後期

〈場所〉で：日本、世界中、全国、ヨーロッパ、ハワイ、アジア、地域、あちこち

〈手段・方法〉で：あらゆる方法、口コミ、ネット、ブログ、言葉、マスコミ、メディア

〈様態〉：自由に、勝手に、早急に、急速に、新たに、故意に、あっという間に、内密に、もっと、さらに、どんどん、徐々に、一気に、しっかり、だんだん、無理矢理

「非共起例（誤用例）」

(34) a ？机を｛広める｝。

b ○日本製の机を海外に｛広める｝。

→すでに多くの人に知れ渡っているものについては使いにくい。

(35) a ？講演会で、思い出を｛広める｝。

b 講演会、思い出を｛語る【披露する】｝。

→単に相手に伝える場合は使いにくい。多くの人に知れ渡るようにする場合に用いられる。

(36) a ×友達に運転技術を｛広める｝。

b　○友達に運転技術を｛教える｝。

c　○市民に、モータースポーツを通じて培った運転技術を｛広めて｝いく。

→広範囲・多数にわたって行われる必要がある。

5．まとめ

以上、本稿では動詞「広まる」と「広める」が持つ複数の意味を記述し、それら複数の意味の関連性（多義構造）について考察した。その結果、2語について、それぞれ2つの多義的別義を認定することができた。

また、この2語は自・他対応動詞であるが、〈図5〉のように別義間にも対応関係にあることが分かった。

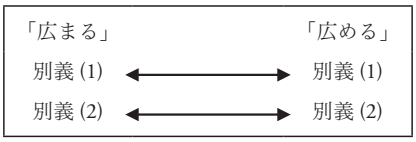

図5　別義間の対応関係

さらに、別義間の関連性については、メタファーの観点から考察を行い、別義間の関連性を明らかにすることができた。

最後に、多義語分析の結果に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導法について考察した。具体的には、各別義における「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、それぞれの別義において想定され得る「非共起例（誤用例）」も提示し、その理由・原因について検討した。

附記：本稿は『国立国語研究所日本語基本動詞ハンドブック』（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp）において、筆者が担当した「広まる」「広める」に修正・加筆したものである。

注

1）詳細は「参考文献」を参照されたい。

2）1.1節と1.2節は、李（2020b）に基づくものである。

3）池上（1978）、瀬戸他（2007）、吉村（2013）、鍋島（2016）、鷲見（2019）、Cruse（1986）、Tuggy（1999）、Lakoff and Johnson（1999）、Taylor（2003[3]）、Evans and Green（2006）、Langacker（2008）などの先行研究においても、多義語の認定について同様の趣旨の記述が見られる。

4）Tuggy（1993）にも同様の趣旨の主張が見られ、ambiguity（両義性）、polysemy（多義性）、vagueness（漠然性）の連続性を指摘している。なお、この3つはそれぞれ同音異義語、多義語、単義語に対応すると考えられている。

5）籾山（近刊）によると、典型的な多義語とは、複数の意味がそれぞれ（相当程度の）自立性を有すると共

に、複数の意味の間に関連性が見出せる語のことである。なお、「作る」の他の意味については、李（2015）を参照されたい。

6）これらの定義は、佐藤（1992 (=1978)）、瀬戸（1986, 1997）、籾山（1997, 1998, 2002）などの研究を踏まえて提示したものである。

7）鍋島（2011）は、従来のメタファー研究の流れ及び認知言語学におけるメタファー理論を概観し、いわゆる「身体性メタファー理論」の枠組みに基づき、日本語のメタファーを理論的かつ実証的に考察している。

8）このモデルは、籾山（2001, 2019）の記述をさらに発展させたものである。籾山（近刊）は「この統合モデルは、放射状ネットワークモデル、スキーマティック・ネットワークモデル、フレームに基づくモデルを統合したものであるから、 3 つのモデルの優れた点はそのまま継承し、さらにこれらを統合することによって、ある多義語の複数の意味すべてを包括的に記述・統合することができるモデルである」と述べている。

9）詳細については、鷲見（2019: 575–581）を参照されたい。

10）スキーマとは 、すべてのカテゴリーの成員に共通する性質を抽出した意味とされ、いくつもの具体例を通じて、一般化、抽象化される。

11）スキーマ関係と拡張関係についての記述は、籾山（2000, 2001, 近刊）に基づく。なお、籾山は、スキーマ関係は比喩の一種であるシネクドキーに相当し、拡張関係はメタファーに相当することを明らかにしている。

12）鷲見（2013: 35–37）に分かりやすく解説されている。

13）本稿では、別義 (1) を「広まる」のプロトタイプ的意味として考える。ただし、籾山（近刊）が「ある多義語のプロトタイプ的意味は 1 つとは限らない」と指摘しているように、「広まる」のプロトタイプ的意味の認定についてはさらに検討が必要である。これと関連して、木下（2019）は、多義語の複数の意味の中には、中心性を持つ語義（別義）とそうではない語義があるとし、松本（2009）を踏まえて、その中心性には「直観的プロトタイプ」と「意味拡張の起点」という二つの種類が認められるとしている。なお、「直観的プロトタイプ」とは、「ある言語のある語の複数の意味の中で、母語話者（の大半）にとって、最も基本的な意味であると直観的に感じられる意味」（籾山（近刊））のことであり、松本（2009: 90）では類似する概念として「機能的中心性」を用いている。また、「意味拡張の起点」とは、共時的な意味で「他の個別的意味の派生の基盤となるような、概念的に最も基本的な意味」（松本 2009: 89–90）のことを言う。さらに、木下（2019: 519）は、山梨（2000）、松本（2009）を踏まえ、この二種の中心性は、多くの場合、同一の語義が担うと考えられるが、両者にずれが生じる例もあると指摘している。この「広まる」について言えば、両者にずれが生じる例としても考えられる。つまり、ここでは「意味拡張の起点」という立場で別義 (1) をプロトタイプ的意味として考えているが、「直観的プロトタイプ」という立場で考えた場合、別義 (2) もプロトタイプ的意味として考えられるということである。詳しい考察は今後の課題としたい。

14）本稿では、いわゆる「意味拡張の起点」として、別義 (1) を「広める」のプロトタイプ的意味として考えているが、プロトタイプ的意味の認定についてはさらに検討が必要である（注13を参照）。

15）「広める」と「広げる」の相違点については、李（2020a）を参照されたい。

参考文献

相澤正夫（1983）「ヒロガル・ヒロマル」『意味分析』, pp. 1–3, 東京大学文学部.

池上嘉彦（1975）『意味論』, 大修館書店.

池上嘉彦（1978）『意味の世界：現代言語学から視る』, NHK ブックス.

李澤熊（2015）「動詞「つくる」の意味分析」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第23号, pp. 75–99, 名古屋大学国際言語センター.

李澤熊（2020a）「「広げる」と「広める」の類義語分析―フレームの観点から―」『日本認知言語学会第21回

大会予稿集』，pp. 15–18，日本認知言語学会.
李澤熊（2020b）『日本語の意味研究の新たな扉を開く―意味分析の方法と実際―』，開拓社.
北原保雄（2011）『明鏡国語辞典』第 3 版，大修館書店.
木下りか（2019）「多義動詞の意味拡張の起点と直観的プロトタイプ」『日本認知言語学会論文集』第19巻，pp. 519–524，日本認知言語学会.
国広哲弥（1982）『意味論の方法』，大修館書店.
国広哲弥（1994）「認知的多義論―現象素の提唱―」『言語研究』第106号，pp. 22–44，日本言語学会.
佐藤信夫（1992（=1978））『レトリック感覚』，講談社学術文庫.
新村出(編)（2008）『広辞苑』第 6 版，岩波書店.
鷲見幸美（2013）「第 2 章 カテゴリー化とプロトタイプ」森雄一・高橋英光(編著)『認知言語学―基礎から最前線へ―』，pp. 27–50，くろしお出版.
鷲見幸美（2019）「多義性と認知言語学」辻幸夫他(編)『認知言語学大事典』，pp. 572, 582，朝倉書店.
瀬戸賢一（1986）『レトリックの宇宙』（MONAD BOOKS 48），鳴海社.
瀬戸賢一（1997）「意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一『文化と発想とレトリック』（日英語比較選書 1），pp. 93–183，研究社出版.
瀬戸賢一（2007）「メタファーと多義語の記述」楠見孝(編)『メタファー研究の最前線』，pp. 31–61，ひつじ書房.
瀬戸賢一他(編)（2007）『英語多義ネットワーク辞典』，小学館.
田中茂範（1990）『認知意味論 英語動詞の多義の構造』，三友社出版.
鍋島弘治朗（2011）『日本語のメタファー』，くろしお出版.
鍋島弘治朗（2016）『メタファーと身体性』，ひつじ書房.
松村明(編)（2006）『大辞林』第 3 版，三省堂.
松村明(監)（2012）『大辞泉』第 2 版，小学館.
松本曜（2009）「多義語における中心的意味とその典型性：概念的中心性と機能的中心性」*Sophia linguistica: working papers in linguistics*, 57, pp. 89–99.
松本曜（2010）「多義性とカテゴリー構造」澤田治美(編)『語・文と文法カテゴリーの意味』（ひつじ意味論講座 1），pp. 23–43，ひつじ書房.
籾山洋介（1997）「慣用句の体系的分類―隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に―」『名古屋大学国語国文学』第80号，pp. 29–43.
籾山洋介（1998）「換喩（メトニミー）と提喩（シネクドキー）：諸説の整理・検討」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第 6 号，pp. 59–81，名古屋大学留学生センター.
籾山洋介（2000）「名詞「もの」の多義構造―ネットワーク・モデルによる分析―」山田進・菊地康人・籾山洋介(編)『日本語 意味と文法の風景―国広哲弥教授古稀記念論文集―』，pp. 177–191，ひつじ書房.
籾山洋介（2001）「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」『認知言語学論考』No. 1，pp. 29–58，ひつじ書房.
籾山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』（シリーズ・日本語のしくみを探る），研究社出版.
籾山洋介（2010）『認知言語学入門』，研究社出版.
籾山洋介（2016）「多義語の多様性：典型的な多義語と単義語寄りの多義語」『日本認知言語学会論文集』第16巻，pp. 512–517，日本認知言語学会.
籾山洋介（2019）「多義語分析の課題と方法」プラシャント・パルデシ・籾山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也(編)『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』，pp. 32–50，開拓社.
籾山洋介（近刊）『多義語の研究』.
籾山洋介・深田智（2003）「第 3 章 意味の拡張」松本曜(編)『認知意味論』（シリーズ認知言語学入門第 3 巻），pp. 73–134，大修館書店.
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』，角川書店.
森山新（編著）（2012）『日本語多義語学習辞典 動詞編』，アルク.
山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之(編)（2012）『新明解国

語辞典』第 7 版，三省堂.
山梨正明（2000）『認知言語学原理』，くろしお出版.
吉村公宏（2013）「多義性（polysemy）」辻幸夫(編)『新編 認知言語学キーワード事典』，pp. 217–218，研究社出版.
Cruse, D. A. (1986) *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
Evans, V. and M. Green (2006) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.（池上嘉彦・河上誓作他訳（1993）『認知意味論』，紀伊國屋書店.）
Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* (Vol. 1). *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
Langacker, R. W. (1988a) "A View of Linguistic Semantics." In Rudzka-Ostyn, B. (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. pp. 49–90. Amsterdam: John Benjamins.
Langacker, R. W. (1988b) "A Usage-Based Model." In Rudzka-Ostyn, B. (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. pp. 127–161. Amsterdam: John Benjamins.
Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
Langacker, R. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.（山梨正明監訳（2011）『認知文法論序説』，研究社出版.）
Taylor, J. R. (1989, 1995[2], 2003[3]) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.（辻幸夫他訳（2008）『認知言語学のための14章』，紀伊國屋書店.）
Tuggy, D. (1993) "Ambiguity, Polysemy, and Vagueness." In *Cognitive linguistics* 4(3). pp. 273–290.
Tuggy, D. (1999) "Linguistic Evidence for Polysemy in the mind: A Response to William Croft and Dominiek Sandra." In *Cognitive Linguistics* 10(4). pp. 343–368.

例文出典

※本稿における例文は、以下のコーパスを参考にして作った作例である。
(1)『NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）』（http://nlb.ninjal.ac.jp/）
(2)『NINJAL-LWP for TWC（NLT）』（http://corpus.tsukuba.ac.jp/）
(3) KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（https://chunagon.ninjal.ac.jp/）

キーワード：多義語、多義構造、比喩表現、コロケーション

Abstract

A Semantic Analysis of *hiromaru* and *hiromeru*:
From the Viewpoint of Japanese Language Education

LEE Tackung

This text described the multiple meanings of *hiromaru* and *hiromeru* in addition to discussing the relation between these multiple meanings (the polysemic structure). Resultantly, it was acknowledged that there were two equivocal different meanings acknowledged for *hiromaru* and *hiromeru*.

Furthermore, the relation between the different meanings was considered by looking at metaphor, and it was thus possible to clarify the relation between the different meanings.

Finally, based on the results of a polysemy analysis, the research considered a method for effectively teaching people to learn all these different meanings. Specifically, a collocation for each different meaning was presented to promote learning, after which the examples of misuse that could be expected for each separate meaning were also presented and the causes and reasons for the misuse examined.

Keywords: polysemic word, polysemic structure, metaphorical expression, collocation